

## 戦闘機パイロット UH-1Nを操縦し、能力を把握 *Fighter pilot flies UH-1N, gains perspective*

April 14, 2016

Original text by Airman 1st Class Elizabeth Baker  
374th Airlift Wing Public Affairs

空軍では、指揮官たちに、麾下の航空機のパイロットコースを履修することを推奨している。在日米軍兼第5空軍司令官ジョン・ドーラン中将はこのほど、高官コースを履修し、彼自身が関東地域内を移動する際にもよく利用しているUH-1Nイロコイを操縦した。

「高官コースの目的は、上級指揮官が、運用に使う航空機の能力と限界を理解し、航空機と人員の導入方法についてより良く理解するため。例えば、外は晴天で暖かくても、強風であれば飛行できないこともある。C-130のように重量のある航空機のパイロットたちは、実際に操縦してみなければ、より小型の航空機の限界を知ることが難しいこともある」と第459空輸中隊のデビッド・ジェイコブ技能軍曹は言う。

高官コースは、4回のフライトで構成され、そのうちの3回が日中、1回が夜間に行われる。最初のフライトで、F-16ファイティング・ファルコン操縦士のドーラン中将は、UH-1Nを2時間ほど飛行した。

同中将の飛行をサポートしたのは、第459空輸中隊のUH-1N乗務員2人。基準評価監査主任のブランドン・ジョーンズ大尉と特殊任務操縦士のデビッド・ジェイコブ技能軍曹だ。

飛行前、ジョーンズ大尉とジェイコブ技能軍曹は、ドーラン中将と共に飛行機の機体の周りを歩きながら外部の基礎的な構造について説明した。ジョーンズ大尉はまた、緊急脱出法を説明し、コックピットの操作や計器の確認事項を指導した。ドーラン中将は、コックピットで計器を指差したり、グリップを確認したり、操縦桿の動きを試しながら、その特徴についていろいろと質問をした。地上トレーニング終了後、3人はベルトを締め、ドーラン中将はイロコイを自身の手で操縦した。

「第459空輸中隊の運用を見れる素晴らしい機会だった。固定翼で飛行するのと回転翼で飛行するのでは大きな違いがあった。ジョーンズ大尉とジェイコブ技能軍曹の2人から、充実した指導が受けられた」とドーラン中将は話した。

ドーラン中将は、輸送やホバリングの他、横・前・後ろ・垂直移動を練習した後、「この機体によく乗るので、第459空輸中隊のコースを受けたいと思っていた。普段、隊員たちとは少し顔を合わすだけで部隊等を訪ねることがなかったのですが、この機会をくれた隊員たちに感謝を述べたい」と述べた。

ジェイコブ技能軍曹は、固定翼機のパイロットたちと働くことで、回転翼機との違いを知ることができ、興味深かったと述べた。「固定翼のパイロットたちにとっては、地上約30メートルで空中に停止することが不思議な感覚だ。また、低空でフライトライン上にいることが多いので、草地でのホバリングは最初、慣れないことがある。また、パイロットが操縦する3次元の動きは全く新しいものだ。これまで飛行した全ての高官が、ヘリコプターを操縦した時、何時にないユニークな感覚を得た」とジェイコブ技能軍曹は述べた。

ドーラン中将は、今回の飛行で横田基地のUH-1Nの運用をより深く知ることができたと述べた。また、もう3回の飛行を通じてその航空機の能力を更に把握する。麾下の複数の空輸中隊の高官コースを履修し、多様な航空機を操縦することを通じて理解を深めている。



飛行の準備をするUH-1Nイロコイの乗務員と在日米軍兼第5空軍司令官ジョン・ドーラン中将

これまで、横田基地司令官デラマター大佐や第374運用群司令官ドットソン大佐を含む上級指揮官が、第459空輸中隊の高官コースでUH-1Nを飛行したことがある



横田基地上空をUH-1Nイロコイで飛行するドーラン中将

「ヒューイ」というあだ名でも知られる同機は、人員・物資輸送や救難救助運用に適した輸送機 (Photo/Tech. Sgt. David Jacobs)